NO.99

蓬左 HÔSA

花屋抄（８頁参照）

蓬左文庫本『日次記』の調査

二〇一七年四月以来、蓬左文庫典籍研究会では、名古屋市蓬左文庫が所蔵する日本古代史関係典籍の調査を進めてきた。この調査は、同年十月から大幸財団の人文・社会科学系学術研究の助成を受けることができたのに続き、二〇一九年の四月からは、新たにシキシマ学術・文化振興財団平成三十年度研究助成（～同年九月）と、日本私立学校振興・共済事業団二〇一九年度学術振興研究資金（～二〇二〇年三月。継続して二〇二〇年四月～二〇二一年三月まで）から助成を受けることができた。

蓬左文庫典籍研究会の活動の中で最も重視してきた典籍は、目録を含めて二三〇冊にもなる二条家の『日次記』である。『日次記』の調査成果は、本誌第九六号（筆者執筆）・第九七号（吉田一彦氏執筆）・第九八号（手嶋大侑氏執筆）にも一部掲載されているが、本稿では、本誌第九六号の記事に続く形で、二〇一八年度後半から二〇一九年度までの調査成果を紹介したい。

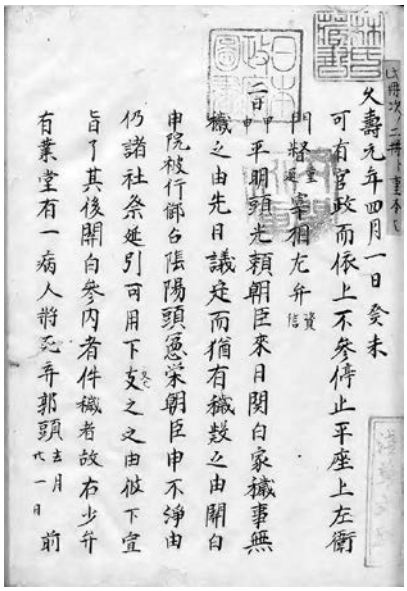
紅葉山文庫本『日次記』

筆者が本誌第九六号の記事を執筆した時点（二〇一八年十月）では、蓬左文庫本以外の『日次記』の主要写本のうち、東洋文庫所蔵本（岩崎文庫本）が紀伊徳川家旧蔵本であることは判明していたが、国立公文書館の所蔵（内閣文庫本）である三三五冊本・二二〇冊本・一一七冊本、および国立国会図書館所蔵一五四冊本を調査したところ、いずれも鶏・狗・猪・羊・牛・馬・人・穀に員外を加える「東方朔占書分類」で整理されており、蓬左文庫本とは別系統の『日次記』であった。その一方、蓬左文庫本の母本である紅葉山文庫本は発見できていなかった。

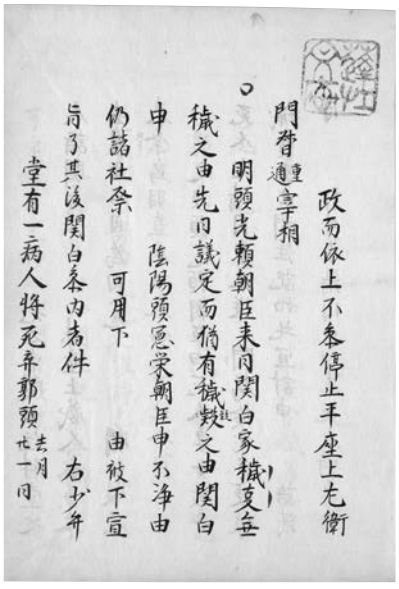
実は、紅葉山文庫本の本文二二〇冊は明治六年（一八七三）五月五日の宮中火災で焼失していたのである。

『明治天皇紀』の同日条には、「……已にして火勢、皇居一円を灰燼と為し、いて太政官・宮内省庁舎を焼き、四時三十分漸く鎮火す……」とあり、火災の激しさを物語っている。

同年八月に歴史課長の長松幹が提出した「秘閣図書之内炎上之節焼失並従来欠本等ノ届」には、この時焼失した秘閣本が一覧にされているが、その中には「日次記　甲乙十函」という記述が見えている。目録一〇冊は難を逃れ国立公文書館に現存しているとはいえ、本文の焼失は大変残念なことである。



▶内閣文庫所蔵２２０冊本『日次記』乙１９相当部分冒頭



▶名古屋市蓬左文庫所蔵『日次記』乙１９冒頭
欠失部分が目立つ

慶應義塾大学図書館所蔵『日次記』

蓬左文庫典籍研究会では、二〇一九年一月に「蓬左文庫本『日次記』をめぐる公家と武家」というシンポジウムを開催した。これは、新発見の足利義満安堵状と後小松天皇勅書（詳細は本誌第九八号参照）の紹介も含め、その時点までに判明した知見を披露することを目的としていたが、なんとその席上で、慶應義塾大学図書館が二条家旧蔵の『日次記』を所蔵している、との情報が寄せられたのである。こうして、『日次記』の調査は新たな段階へと突入することとなった。

二〇一九年八月、研究会メンバーのうち吉田・丸山・松薗・浅岡・手嶋・芝田・西山各氏と筆者は、慶應義塾大学図書館を訪れ、所蔵する『日次記』を調査させていただいた。

その結果、同館所蔵の『日次記』は、寛保元年（一七四一）に幕府が紅葉山文庫本を書写して二条家に贈与した、新二条家本『日次記』であることを確認できた。元々『日次記』を編纂・所蔵していた二条家は、江戸時代前半の火災で『日次記』を失っていたが、幕府の助力で再び『日次記』を所有していた。その新写本『日次記』が、我々の前に姿を現したのである。

東方朔占書分類本『日次記』

一方、蓬左文庫本とは別系統になる、東方朔占書分類本四種の調査も順次進めた。東方朔占書分類本は、十干分類本（蓬左文庫本など、甲乙丙丁戊己庚辛壬癸で分類したもの）の配列を入れ替え、重複本を削除した上で「総目録」を附しているので、十干分類本から派生したことが想定できる。この考え方では、二条家で『日次記』が編纂された後、何者かが『日次記』を書写して十干分類を東方朔占書分類に改めたということになる。

ところが、研究会メンバーが分担して作成した蓬左文庫本の調書を手がかりに、『日次記』の十干分類本（蓬左文庫本・東洋文庫所蔵本・慶應義塾大学所蔵本・東山御文庫本）と東方朔占書分類本を比較すると、両者は本文の内容も別系統であり、しかもテキストは東方朔占書分類本の方が良質ということが判明した（前頁図版参照）。

ということは、二条家で編纂された『日次記』が紅葉山文庫本の直接の母本になったのではなく、現十干分類本『日次記』よりもテキストが良質な、「元」十干分類本『日次記』を想定し、そこから東方朔占書分類本が分岐した後、虫損の進行や書写の誤りなどによりテキストが劣化して、現十干分類本『日次記』が成立した、と考えなければならない。『日次記』の成立は、これまでに想定していたよりも複雑なようである。

ウェブサイトの開設

以上の成果は、前述した二〇一九年一月のシンポジウムや、本年二月に開催したシンポジウム「蓬左文庫本『日次記』をめぐる公家と武家Ⅱ」で報告させていただいた。本稿で紹介できなかった成果も少なくないが、それらは論文など別の形で公にしていきたい。

さて、蓬左文庫典籍研究会では、会の活動を広く知っていただくために、ウェブサイトを開設した。現在、新型コロナウィルスの拡散防止のため、調査は中断を余儀なくされているが、情勢が好転して、研究会・講演会やシンポジウムなどを開催できるようになった場合は、詳細をウェブサイトに掲載するので、ぜひ訪問していただきたい。ウェブサイトのＵＲＬは、https://taweb.aichi-u.ac.jp/sgohbcd/main.htmlである。

（愛知大学教授　廣瀬憲雄）

展示室1・2

企画展

怪々奇々 ―鬼・妖怪・化け物……―

死後の世界、寝静まった後の夜の時間、暗い闇の向こう側、普段立ち入らない場所や、他人の心のなか…。見えない領域にひそむ恐怖は、鬼や妖怪・幽霊といった存在に置き換えられてきました。

『徒然草』の第五十段には、応長年間（一三一一～一二）、京にあらわれた鬼を見ようと人々が方々に出かけ、しまいには喧嘩がおきた、という話が書かれています。当時、数日間続く病に苦しむ人が増えており、鬼はその前触れだったのではないかと言う人もいた、と最後は締めくくられています。実際に、延慶三年（一三一〇）には「三日病」と呼ばれた風疹が九州から関西、さらに全国的に流行し、改元にまで至りました。『徒然草』の記述には、当時の人々が疫病という見えない恐怖を、鬼に置き換えて解釈していたことがうかがえます。

鬼や妖怪・幽霊は、物語の中にも登場し愛好されました。『近世怪談霜夜星』は、かつて恋人同士だったお花と再会した伊兵衛が企てて、妻のお沢を追い詰め、その後お沢の怨霊によって苦しめられる怪談に、葛飾北斎（一七六〇～一八四九）が挿絵を加えた読本です。物語はもちろん、北斎の画技が発揮された、怨霊がもたらす恐怖に満ちた画面が魅力的です。

また、個性的な姿で描かれた妖怪は人々の目を楽しませてきました。「武大夫物語絵巻」は、いわゆる「稲生物怪録」と呼ばれる物語絵巻群の一つです。江戸時代の寛延年間（一七四八～五一）に、武大夫という十六歳の武士が真夜中に肝試しと百物語を行ったのをきっかけに、七月一日から三十日間、連日様々な妖怪があらわれる様子が描かれています。最後の場面では魔王の山本五郎左衛門が登場し、武太夫の勇気を認め、カラフルな眷属の妖怪のにぎやかな行列とともに去っていきます。

本展では、古典文学に記された怪奇現象から、鬼や妖怪・化け物の世界をご紹介します。

（※会期中、一部展示替えをおこないます。）

徒然草絵巻
十二巻の内 巻三（部分）
江戸時代　17-18世紀　徳川美術館蔵

近世怪談霜夜星　五冊の内　巻四
柳亭種彦作・葛飾北斎画
江戸時代　文化5年（1808）
名古屋市蓬左文庫蔵
（尾崎久弥コレクション）

武大夫物語絵巻
三巻の内 巻下（部分）
江戸時代　19世紀　徳川美術館蔵

展示室1・2　徳川美術館本館

秋季特別展

殿さまが好んだヨーロッパ
―異国へのまなざし―

現在、徳川美術館に所蔵される尾張徳川家伝来の日欧貿易関係品は、御三家筆頭にふさわしい質の高さと希少性で国内外に広く知られているコレクションです。特に目を惹くのは、十六世紀末期から十七世紀にかけて製作されたヨーロッパやインドなどの工芸品です。オランダで壁貼革として製作された装飾性豊かな金唐革や、ドイツで金属器写しの精緻な貼付文を施した灰色藍彩炻器、南インドで製作された上質で柔らかい木綿布に鮮やかに多色文様を染め出した更紗などは、当時すでにヨーロッパでも上級の工芸品として取引されていましたが、わたしたちは絵画史料などで在りし日の姿をうかがうのみで、実物のほとんどは今日では失われています。

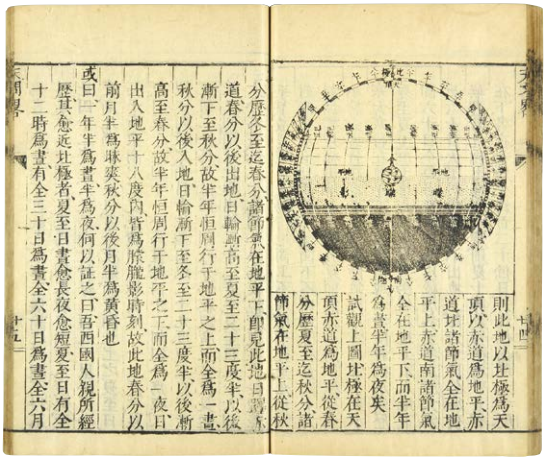
尾張徳川家には、ヨーロッパにもほとんど残っていないそうした工芸品が、状態も良いまま伝わっており、研究者を驚かせています。尾張徳川家の殿さまたちが手に入れ、享受した珍しい品々は、広く一般に出回る類の製品ではなく、本国でも日本でも一部の特権階級のみが「贈答品」や「特別販売品」「注文品」として入手できた高級な文物といえます。さらに、名古屋市蓬左文庫には、イエズス会士経由で中国にもたらされた天文学・数学などの知識を記した十七世紀前期の漢籍をはじめとして、江戸時代を通じて日本へもたらされた自然科学の知識や当時の世界情勢などに関する漢・和・洋書や世界地図類が残されています。

本展でご覧いただくこれら様々な文物を通じて、尾張徳川家の当主たちが目にし、触れていた十七世紀から十九世紀のグローバルな世界を感じていただければ幸いです。

（※会期中、一部展示替えをおこないます。）

Venationes Ferarum, Avium, Piscium（阿蘭陀人殺生図）
一〇四枚、四巻の内（ヤン・ファン・デル・ストラート原画）
フランドル・アントワープ　16世紀以降　徳川美術館蔵

ラテン語の原題は「野生動物、鳥類、魚類の狩猟」の意ですが、尾張徳川家では「阿蘭陀人殺生図」として伝来しました。フランドルの画家ストラートの原画を銅版画一〇四枚の揃いとした作品で、日本で四巻の巻子装にされています。江戸時代、ヨーロッパからもたらされた様々な銅版画は、洋風画・洋風銅版画や浮世絵のインスピレーションの源にもなりましたが、完全に一〇四枚が揃った貴重な銅版画集である本作が、なぜ、またいつ頃から尾張徳川家に収められているのかは不詳です。



天学初函（六十巻二十四冊のうち）
中国・天啓年間（1621 ～ 28）刊
李之藻編・徐光啓訂　名古屋市蓬左文庫蔵

イエズス会士マテオ・リッチ（1552 ～ 1610）はじめ、中国・明王朝の宮廷世界で知識人らと交流し、ヨーロッパの科学技術や学問を紹介した宣教師らの著作を漢訳した叢書です。本書にはキリスト教の教義も記されていることから、寛永7年（1630）には「禁書」とされました。尾張徳川家初代義直の収集した書籍の一です。

宿場町・鳴海の祭り今昔（1）

名古屋市東南部の緑区には、江戸時代、東海道の宿場町として栄えた鳴海という地域がある。江戸時代に記された祭礼記録と、現在同地に伝わる祭りを比較しながら、いくつかを紹介してみたい。

◆蛤地蔵の大般若

高力猿猴庵著『尾張年中行事絵抄』（文政頃成立）正月二十四日に次のような記述がある（名古屋叢書三編第五巻、五六頁及び五八頁挿絵）。

△廿四日、鳴海如意寺地蔵祭。宝前に蛤を備へて読経有。終て蛤を海に放つ。是は放生会也。又、此庭に里人集て的（青鬼降伏の文字を書）を射る。是は昔青鬼有て旅人をなやます事あり。地蔵尊の利益により、鬼を退治せし故なる由。又、備へ物の染餅を投施こす。

彩色の挿絵では山盛りの蛤が仏前に供えられており、段上の三方に盛られているのが、染餅であろう。また、屋外には歩射の的が描かれる。別頁の挿絵には先の説明と同様の一文とともに、

放ち見よ　その蛤の　遠がすみ　亀章

の一句が記される。この一句は冒頭の解説とともに、天保十五年（一八四四）刊行の『尾張名所図会前編』にも収録されているが、句を詠んだ亀章とは、鳴海下郷家第四代当主亀世（きせ）の三男で、後に六代当主となった学海の兄に当たる人物。また分家・金剛家の創設者でもある。下郷家一統は代々俳諧をたしなむ伝統を受け継ぐ家風があった。

この蛤地蔵の祭りについて、江戸時代に鳴海村の惣年寄を代々務めた下郷家の当主の日記では、古くは貞享二年（一六八五）に二代目の知足（ちそく）が正月の項に「廿四日晴天、地蔵歩射へ参詣」と記している。それから百年以上下って、寛政六年（一七九四）に第七代の伝芳、文化十三年（一八一六）に第八代の不借、天保十二年（一八四一）から安政三年（一八五六）にかけて第九代の此汐（六喫園）が、それぞれ次のように記している。

・寛政六年正月廿四日　晴天
一例通作町如意寺地蔵様へ仏供米、蛤遣申候。

・文化十三年正月廿四日　晴天
一如意寺地蔵尊**江**蛤壱升、王銅十疋、句米（供米の意か）壱升上ル。如意寺火伏セ休日。
一町内若キ者**江**如意寺大般若ニ付、初尾五拾銅遣ス。

・天保十二年正月廿三日　晴
一如意寺地蔵様へ如例蛤三十、御供米壱升、御ひねり壱勺差上候。

・天保十四年正月廿四日　曇午後晴風ニナル
一例年之通、強雨如意寺地蔵様擔般若御祈祷有之。休日。尤例之通、蛤御供米相供申候。

・弘化二年正月廿四日　晴西風烈
一如意寺歩射祭ニ而如例年地蔵様へ蛤壱鉢上ル。午後家内不残休日。

・弘化四年正月廿四日　西風
一如意寺**ニ而**如例大般若有之。蛤壱升、御供米差上候。

・安政三年正月廿四日　午晴大西風
一如意寺地蔵堂於有之如旧例大般若有之。□（虫食）亦歩射式等有之。昼後村中休日。蛤代七拾弐文分上ル。

蛤を一升奉納するなど、信心深かったことがよくわかるが、砂地で遠浅の伊勢湾沿岸は魚介類に恵まれ、古くから採貝漁が盛んであった。昭和三十年代初頭までは、名古屋随一の漁村だった下之一色には足の指先に触れる感覚だけで海中の貝類（主として蛤）を採集する「踏取（ふみどり）」を生業とする漁師の集団がいたほどである。

現在では、残念ながら蛤の奉納も歩射神事もなく、大般若の転読だけであるが、それでも檀家や日頃地蔵尊にお参りする信徒が二月二十四日に集まり、般若心経の読経と共に願主名と願目（身体健康心願成就）を仏前で唱えてもらい、新たな御札を授かる。旅人を悩ます青鬼を退治したという縁起は宿場町ならではの伝承である。

◆成海神社の御船板流し神事

前掲同書、六月二十一日の項に次の記述がある（名古屋叢書三編第六巻、二一三頁及び二二二～二二三頁挿絵）。

△廿一日、成海神社祭、神幸。抑当社は、祭神日本武尊にして、東夷を亡し給はんとて、此地より御船にめされし神跡なり。其御出陣の粧ひをうつせし、神祭たりとぞ。此日、午の刻頃輿神を出し奉りて、南大門の山路を渡り、雷地山を越て、宿町なる一の鳥井を経て扇川に至り、此川の北の汀に神輿を置奉り、神主御船と准へて、板三枚を川水に流す。是を御舟板と称ず。其形左の如し。〔割注：尾張の国と書ざるはいかなる故にや。〕

天下泰平
大日本洲愛智郡正一位成海神社

御三神船

二枚目の板には、国土安穏、三枚目には疫癘消除とあり。此川下は海に入るなれば風波にしたがひては、遠き嶋々までも流行べし。されば当社の神号は、蛮国迄も聞ゆなるべし。実大なる神祭にあらずや。

扨其神幸の次第は、剣頭の箱祓を持、大神楽、獅子舞の屋体を釣りて、囃子ものあり。杖つき、裃着、二人白丁、一人榊を持、笛・太鼓・囃子方は素袍着にて、釣人は白袴を着す。備物釣人二人、白袴を着す。神輿台持は白袴着なり。神幡四流、真剣二振、弓二張、是は素袍着の者持行なり。太刀四振、児供裃着これを持。御船板は、布衣の者これを持行。幣白は社人これを持、二人あり。神主家、供人数多にて神輿の先に進む。神輿には緋の御綱をつけて、氏人等裃を着し、社人と共に此綱を引なり。神輿の左右には、白袴着たる者、衣蓋をさしかく。其後には裃着、大勢供奉す。次に、神馬をひくなり。又、町々より車を出す。但し神幸を供奉するにはあらず、町通を渡りて囃子のみなり。其上段には機関の人形を乗せ、中段の正面に引幕を張り、これを開てあやつりをなせり。人形は其時々によれば、定たる事にはあらず。其車を出す所々は、木之本〔割注：山のはな共いふ〕花井町、横町、丹下町等なり。

現在、この神事は十月第二日曜日におこなわれており、獅子舞と神馬が加わらない他は、猿猴庵の記述とほぼ変わることなく、執り行われている。

旧東海道に沿って東西に長く連なる鳴海宿は、その氏子区域が三つに区分される。最も東側の平部は諏訪神社、中央の中嶋町・相原町・本町・根古屋・作町の五町は鳴海八幡社、西側の三皿・城之下（この二町はもとは一つで山花町といった）・花井・北浦・丹下は成海神社が氏神である。

このうち、鳴海八幡宮の氏子区域を表方、成海神社の氏子区域を裏方と称している。この区分は戦国期に根古屋に設けられた城を境とする地理的な区分だっただけでなく、行政区分でもあり、江戸時代には表方・裏方それぞれに庄屋役が設けられていた。

このうち、裏方の氏神である成海神社の祭礼には、今でも四町が所有する山車四輌が曳き出され、神社拝殿前に厳かに山車を曳き出して囃子を奉納する「神上神事」がおこなわれる。そしてこの神事が終了した後、神輿行列が山を下って扇川まで行き、御船板を流す神事が執り行われる。

扇川に架かる浅間橋の袂横にはあらかじめ笹竹二本を立てて注連縄が張ってある。その位置から神官が御船板を川に投げ込み、裏方の若者たちがそれを拾い上げる。かつて舟運が盛んだった頃は船主がその御船板を授かって海上安全のお守りとしたが、現在では家内安全の護符としているという。

（蓬左文庫　井上善博）

表紙：花屋抄（カオクショウ）　慶福院花屋玉栄著　4冊　慶長8年写　25.0㎝×17.8㎝

花屋抄

室町時代の公卿である近衛稙家の娘・慶福院花屋玉栄によって著された『源氏物語』の注釈書である。

平安中期に成立した『源氏物語』を深く読み解こうとする注釈行為は、すでに平安末期にはじまり、鎌倉・室町期には歌学の発展とともに、学問としての重要性を帯びていった。しかし、そうした『源氏物語』の注釈書は専門知識を持った男性の有識者によるものが多く、初学者がその内容を理解することは困難であった。そこで幼い者や女性たちのために、『源氏物語』の世界に親しむことを目的として著されたのが『花屋抄』である。それまでの男性研究者の視点を離れ、女性の立場から著された『花屋抄』は、『源氏物語』注釈のなかでも特異な存在として位置付けられる。

蓬左文庫に所蔵される『花屋抄』には、跋文の奥に「慶福院花屋玉栄／六十九才／文禄三年文月日書之也」「慶長八年三月日これをうつし畢」とあり、文禄三年（一五九四）、玉栄が六十九歳の頃に著した原本を、それから間もない慶長八年（一六〇三）に写したものであることがわかる。これは現存諸本のうち最も古い写本と言える。この奥書を残す本は珍しく、玉栄の作であることを明確に示す伝本としても貴重である。

本書は、尾張徳川家二代当主光友の蔵書として蓬左文庫に伝来した。御文庫には、河内本『源氏物語』をはじめとして『源氏物語』関係の書物が多く収められている。注釈書では『花屋抄』のほか、『万水一露』や『岷江入楚』の写本も早くから伝わる。近世に至るまで、『源氏物語』は知識人にとって必須の教養とされてきたが、尾張徳川家においても注釈書とともに享受されていたことがうかがえよう。

とりわけ、父義直から学問好きの血を受け継いだ光友の蔵書には、物語や歌書などに優れた古写本が多い。光友は諸学のなかでも和歌を好んだと言われ、延宝年間（一六七三～一六八一）には佐野（灰屋）紹益から『古今和歌集』についての秘伝を相承する「古今伝授」を受けている。当時の歌学においては物語の知識が不可欠であったが、光友が『花屋抄』など『源氏物語』の注釈書を蔵書としたのも、こうした自身の文芸活動と無関係ではないだろう。女性による『源氏物語』享受という観点のみならず、藩主の嗜好を顕す蔵書としても興味深い伝本である。

（蓬左文庫　末松美咲）

蓬左文庫

名古屋市蓬左文庫　〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地　TEL（052）935-2173　FAX（052）935-2174

ホームページ　http://housa.city.nagoya.jp/〈蔵書検索もできます。〉

交通案内

■公共交通機関をご利用の場合

●名古屋駅より

【なごや観光ルートバス（メーグル）】名古屋駅前11番のりば名古屋駅発着で平日30分～1時間に1本、土・日・休日は20分～30分に1本運行、「徳川園・徳川美術館・蓬左文庫」下車徒歩1分

【市バス】名古屋駅前10番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

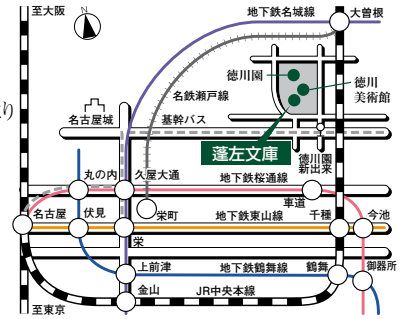
【名鉄バス】名鉄バスセンター3F　4番のりば基幹バス「三軒家」方面行「徳川園新出来」下車徒歩3分

【ＪＲ】JR中央本線、「大曽根」下車南出口より徒歩10分

【地下鉄】東山線「藤が丘」方面行、「栄」で名城線「右回り」に乗り換え「大曽根」下車③番出口より徒歩15分　桜通線「徳重」方面行、「車道」下車①番出口より徒歩15分

●栄より

【市バス】栄バスターミナル（オアシス21）3番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分



■お車をご利用の場合

蓬左文庫専用駐車場はありません。徳川園駐車場（有料　30分120円）をご利用下さい。

ご利用案内

■休館日／月曜日（祝日・振替休日のときは直後の平日）　※催事により変更することがあります。

令和2年12月14日(月)～令和3年1月4日(月)は特別整理・年末年始により休館します。

■展示室／有料　一般：1400円　高大生：700円　小中生：500円（蓬左文庫・徳川美術館 共通観覧）

令和2年6月6日(土)～7月12日(日)、11月8日(日)～12月13日(日)、令和3年1月5日(火)～1月31日(日)は、一般の観覧料は1200円です。

【開室時間】午前10時～午後5時（入室は午後4時30分まで）

■閲覧室／無料　館外貸し出しはいたしません。

【閉架図書】午前9時30分～午前12時　午後1時～午後5時　【開架図書】午前9時30分～午後5時

【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。電話・郵便による申込みも可。

蓬左文庫 Facebook

「蓬左」第99号　☆令和2年6月5日発行　☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫　☆無料3,500部　☆不定期刊行　☆印刷：菱源（株）

※古紙パルプを含む再生紙を使用しています。